

中国建国初期におけるレーニン服の流行の メカニズムに関する考察

The Mechanism of Lenin coat Penetration During Early Founding States of China

張 玲

ZHANG Ling

愛知大学国際中国学研究センター客員研究員

International Center for Chinese Studies, Aichi University

E-mail: zhangling@estate.ocn.ne.jp

Abstract

The Lenin coat was very popular as Chinese women's wear during 1949 to the middle of 1950s. It is drab and sexless. This article argue the accepted opinion that it was due to political pressure of the Chinese Communist Party and socialist ideology. With a more detailed analysis, and focused on several historical facts that had been overlooked so far. This paper asserts that the popularity mechanism of Lenin coat has transformed and can not necessarily result in the influence of political pressure and socialist ideology.

Key words: Chinese women, the Lenin coat, epidemic mechanism

はじめに

1949年に中華人民共和国が成立したのち、中国女性の服装は一変した。伝統的な服装は姿を消し、青色のレーニン服が中国女性に愛用され、1966年の文化大革命まで女性の服装を支配した。

なぜ中国女性は、長い間愛用されたチャイナドレスやその他の伝統装飾を捨て、レーニン服を着たのか。一般的な見解（たとえば楊清 2012、湯鋭 2017、潘敏 2002）は、中華

人民共和国の成立に伴う政治・経済・文化体制の大きな変化により、政治の圧力および社会主義イデオロギーの影響が女性に及ぶことで、レーニン服が選ばれたというものである。つまり、レーニン服の着用は女性自身による自発的なものではなく、中国共産党および中央政府に主導されていたということである。これらの見解は、「文化大革命悪論」と共にかなり中国社会に定着しているが、厳密かつ詳細な分析に基づくものは非常に少ない。

しかし、これらの指摘を歴史的な事実と照らし合わせると、必ずしもうまく説明がつかない実態があったことがわかる。例えば1950年代に中国政府は“カラフル服装運動”(原文「穿花衣运动」)を主導して、国民、特に女性にレーニン服に限られない多様な、カラフルな服を着るようにと広く呼びかけた。これは中国共産党、中央政府が意図的にレーニン服を女性に着用させるという、従来の見解と矛盾しているように思われる。

そこで本稿は、中国建国初期におけるレーニン服の流行に焦点を置き、当時の歴史資料(政府文献、新聞雑誌、当事者回顧録)を基に、従来の通説である“政治強制およびイデオロギー主導説”を検証すると共に、レーニン服流行のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

以下第一節では、近代以来の中国女性の服装を歴史的に概観する。第二節では、これまで見落とされてきたいくつか歴史的事実を取り上げ、さらに服装の流行に関連する理論を用いながら、中華人民共和国の成立後になぜ中国女性はレーニン服だけを着るようになったのかを検討する。最後にこれまでの分析を整理し、本稿の見解を提示する。

1. 近代以来中国女性の服装

近代以前の中国社会において、女性は基本的に上着の袍と衫、そして下衣とする裙を着用していた。いわゆる「上衣下裙制」である。著名作家の張愛玲はこれに関して、「三百年にわたる清朝の統治のもとでは、女にとってファッションなど存在しないも同然で、相も変らぬ服装に飽きることがなかった」と嘆いていた(張愛玲「更衣記」参照)。

20世紀に入ると、辛亥革命の勃発により、200年あまりに亘って中国に君臨した清朝政府が転覆され、中国は民主共和の新段階に入った。清朝の封建思想を一掃するため、民国政府は煩わしい衣冠を廃止し、男子辮髪および女子纏足の陋習を取り除いた。

当時欧米では女性解放運動が盛り上がりを見せていたことも背景にして、中国女性の服装は劇的に変化した。まず女子学生の服装が流行し、そして日本の女子がまとっていた服装の影響を受けた、いわゆる「文明新装」(図1参照)は一世を風靡した。その様式は細くて長い襟の単と袴、そして長いスカートにより構成される。服は短くてお尻を隠さず、袖の丈が肘を越えず、袖口はラッパ状で、裾は弧を描いていた。



図1 20世紀初期の文明新装



図2 1930年代のチャイナドレス

1920年代からは、シンプルで体のラインにフィットさせるチャイナドレスが女性に歓迎された。1940年代まで、チャイナドレスは襟や、スリット、丈の高さなどに変化はあったものの、基本的な様式を維持したまま愛用され、中国女性の主流的な服装となった。

それ以外に、欧米様式の「洋装」も人気を得ており、洋風のウェディングドレス、スーツ、ストッキング、ハイヒール、ワンピースも市民の生活の中で流行した。このような西洋ブームに対して、伝統を守ろうとする一部の国民は、反対の姿勢を示した。例えば当時、「ストッキングを着用するのは西洋人のおならを嗅ぐことだ」（原文「着丝袜是吃外国屁」）というタイトルの評論が発表され、皮肉のこもった批判が展開されていた。

この時期、女性のファッションはかなり露出度が高く、大胆なものだった。図3は1930年代の上海で使われる月份牌（1920-1930年代に盛んになったカレンダー広告）である。この月份牌に描かれた美人は、すでにホットパンツと谷間を堂々と見せる袖なしジャケットを着ており、セクシュアルな魅力を演出していた。この一作品をもって当時の女性の一般的な姿を代表しているとするのは不十分かもしれないが、当時の時代の様相、ある



図3 1930年代の上海で使われた月份牌

いはモダンガールに対する人々のイメージを反映していると言えるだろう。

露出度の高さと同時に、贅沢さを求める風習が社会的現実となり、多くの女性は最新のファッションを模倣して新たな姿を追い求めている。“上海のお金持ち、特に女性は、服の購入に最も熱心で、しょっちゅう買い物するが、二・三日も着ていないうちにすぐに飽きて、その服をタンスに放り込む”(「上海顔色問題」参照)。当時の蒋介石政府はこのような奢侈を好む社会風潮を改善するため、1934年から“新生活運動”を展開し、国民に清潔、簡

単、素朴な服装を推奨した。

しかし、女性のファッションや流行に対する熱気は一向に収まらなかった。女性のファッションは百花綻放の態勢となり、女性のファッションに関する議論もよく雑誌で掲載されていた¹⁾。

概して言えば、20世紀初期から40年代まで、中国女性の服装文化は非常に豊かで、多様性を見せていた。この中でも特に、細く、女性の体の曲線美を強調する旗袍(チャイナドレス)は大変人気を得ており、女性の服装の主流となった(李子雲等、2009)。

2. 中華人民共和国成立初期の女性服装

1949年に中華人民共和国(以下は新中国と略称する)が成立するに伴い、中国社会の政治・経済・文化体制に大きな変革が起きた。それと同時に、時代的な美女のイメージにも変化が生じ、女性の服装に大きな変化が見られた。

日本の著名な民俗学者である鳥居龍蔵(1951)は、この変化を次のように述べている。“いま中国では、衣服は一変し、プロレタリア式になり……大学教授、官吏、工人、商人に至るまで同一様式の服を着る。……婦人はズボンをはき、男子と同様な服装を着ている”。

ここでの女性用プロレタリア式の服というのは、レーニン服を指していた。レーニン服

1 当時の女性誌『婦女雑誌』では服装に関する評論をよく載せていた。例えば1921年第7巻第9号の「女子服装の改良」(原名「女子服装的改良」)、1930年第16巻第5号の「女性の着装的適切問題」(原名「一个妇女衣着的适切问题」)、1930年第16巻第12号の「現代女性服装トレンド」(原名「现代妇女时装热」)、1931年第17巻第11号の「モダンガールに対する感想」(原名「对时髦女子的感想」)等。



図4 50年代初期レーニン服を着用する党の女性幹部



図5 レーニン服を着用している宋慶齡

は文字通り、もともと中国由来のものではなく、ソ連および東ヨーロッパの男性の日常的な服装から伝来したもので、当時ソ連の指導者レーニンがよく着用する服に似ていることから、レーニン服と名付けられた。レーニン服は、ベルト付きの短いジャケットである。衿が背広式で、下部には左右一つずつに斜めの隠しポケットを付けており、三つあるいは四つのダブルボタンが胸と腰の位置に付けられていた。裏地のないものは夏秋用で、綿入りのものは春冬用であり、色は灰色、藍色を基調としていた。

レーニン服は日中戦争の時期に延安で流行したが、新中国の成立以降、ますます人気を得て普及した。当時の雑誌に掲載された模範的な女性、例えば中国初の女性の電車運転士、初の女性トラクタードライバーらはレーニン服を着用し、国家副主席であった宋慶齡も度々レーニン服の姿を国民に見せた。1949年から1965年の17年間、レーニン服は中国女性の服装の主流でありつづけた（李子云等、2009）。人民服はその補完として使用された。レーニン服と人民服に共通する特徴は、シンプルかつ素朴で、女性らしさを強調せず、男女共通の中性的な服装であった点である。

3 レーニン服の流行メカニズムに関する考察

3.1 レーニン服の導入と普及

前述のように、1949年から1965年までの17年間、レーニン服は中国女性服装の主流であった。レーニン服の特徴は、素朴で、女性らしさを強調せず、男女共通の中性的な服装であった点にある。近代中国社会の女性の服装とは全く異なり、女性ファッション文化に突然の断絶さえ見られた。

なぜ中国女性は長い間愛用されたチャイナドレスや、その他の伝統装飾を捨て、中性的

なレーニン服を長く愛用したのか。一般的な見解はこれを“政治強制およびイデオロギー主導”に帰着するが、ここではまずレーニン服の最初の発端に遡って、その流行の源流を探る。

周知のように、1930、40年代の中国社会は激動の様相を示していた。1937年の盧溝橋事件を導火線に、日中戦争が勃発した。1945年の日本の敗戦により日中戦争が終結すると、国民党と共産党との対立が激化して国共内戦が始まった。長年の戦争により、中国国民は貧しく不安定な生活を強いられた。そのため人々は無能で腐敗を抱えるとされた蒋介石政権を憎み、中国共産党が延安で設立した新政権に羨望の眼差しを向けた。いくつかの障害を乗り越え、自ら延安に身を移した青年女性も大勢いた。延安に到着した後、これらの女性のほとんどは延安抗日軍政大学、中国女子大学等の学校に配属され、再教育および軍事訓練を受けた。これらの学校は軍事的な管理システムを採用していたため、彼女たちは軍服の着用を義務付けられていた。軍服は政府により支給され、夏は裏地のないもの、冬は綿入りのものであった（丁雪松、2000）。

男女共通の軍服は灰色一色で、男女の性差を目立たないものにしてしたが、女子大学生はできるだけ男子との区別を図ろうとしていた。軍服の袖口や襟に白色や青色の小縁を付けたり、目立たないところに刺繍を加えたりして、女性らしさを表現しようとした（朱鴻召、2007）。

国民党政権からの軍事・経済封鎖への対応のため、共産党は延安で「大生産運動」を展開し、食糧や被服等の基本的な生活用品の自産自足を図った。このため当時の中国女子大学には十何台のミシンが配られ、自らユニフォームを作ることができた。これをきっかけに、1940年に中国女子大学の女子学生たちはソ連男性の普段着を見本に、女子大学のユニフォームとするレーニン服を自らデザイン・製作した。レーニン服は同年3月8日の国際女性デーを祝うグループダンスで正式に披露された。ベルト付きのレーニン服はウエスト・ラインを強調することで女性の体の曲線美を表し、女子大学生の姿をよりかわいらしく表現した。この演出は成功を収め、これをきっかけにレーニン服は延安で一世を風靡したのである（徐嵐、1999）。

以上の史実から二つの事実が見出せる。第一に、最初のレーニン服は女性性の隠蔽を目的としたものではなく、むしろ、物資が制限された環境の中で女性らしさをより強調するために作られた服だということである。第二に、レーニン服の導入は、延安の女子大学生自身によるものであり、中国共産党と中央政府の主導によるものではなかったということである。政治環境の影響は多少あったかもしれないが、直接的な因果関係にはなかったといえよう。

中華人民共和国が成立した後、女子大学生から中国共産党の女性幹部に成長した進歩女性たちは、依然レーニン服を愛用していた。中国人民政治協商会議第一回会議で、多くの



図6 中国人民政治協商會議第一回會議の女性代表

女性代表たちはレーニン服を着て会議に参加した。

しかし、経済条件は既に改善されており、服を買うぐらいの経済力を充分に持っていたはずである。にもかかわらず、彼女たちはなぜ依然としてレーニン服を愛用していたのだろうか。この点に関しては、次の原因が考えられる。

第一に、長年レーニン服を着用することで、レーニン服はもはや延安女子大学生そして共産党女性幹部の象徴的な記号となり、レーニン服を通じて、自分自身の階級性・先進性を示すことができたことである。また第二に、中国共産党は一貫して「勤労・節約」「苦勞を気にせず素朴な生活を送る」(原文「勤儉節約」、「艰苦朴素」)といった消費観および価値観を提唱していたことがあげられる。生活条件が改善されても、服を含めて以前のような素朴な生活するのは、党の方針への賛同を具現化する手段であったと考えられる。さらに第三に、レーニン服を着ることが「男女平等」を主張することにつながったことにもその一因を見いだせよう。

第二の点についてより詳しく説明しよう。中華人民共和国の成立以前、戦争により物質不足の困境に直面していた中国共産党は、一貫して「勤労・素朴そして節約」の価値観と消費観を提唱した。1933年12月には、毛沢東による「汚職と浪費行為を厳しく処罰する」訓令(原名「关于惩治贪污浪费行为」)が公表され、汚職と浪費行為に具体的な罰則が設けられた。抗日戦争の間、国民党政府の軍事・経済封鎖を突破するため、共産党は「勤儉節約」の方針をさらに強調し、「解放区におけるすべての仕事を推進する際、地域の人力と資源を長期的な視野で考えなければならず、浪費は避けるべきである」と強調した(中国共産党第七回代表大会で毛沢東の報告より)。中華人民共和国が成立した後、臨時憲法と見なしていた「中国人民政治協商會議共同綱領」の中でも「汚職嚴禁、浪費禁止」が書かれていた。当時の共産党の女性幹部にとって、新しい服装を作らず、以前から身に着け

ていたレーニン服を着用することは、党の方針に合った行為だったのである。

また第三の点について、レーニン服を使用することは、男女平等を主張する側面もあった。男性の服装を着用することで、男女平等を表現あるいは主張する動きは、19世紀後半にすでに見られる。中国で早期に女性の権利を提唱した康有為は、“女性は男性の私物と認識され、男性を喜ばせるため、女性は纏足、細腰、化粧等、身体に害を与えることまで強要された。男女平等には男女の服装を一律にする制度を作る必要がある”と述べていた（康有為《大同書》）。近代中国で最も有名な女性解放運動の先駆者である——秋瑾も、男装の愛用者であり、写真に残されている彼女の姿は、女装より男装の方が多い。

19世紀末中国で始まった女性解放・男女平等の認識は、やがて“男女は平等であるがゆえに、女性も男性と共に国家の興亡に闘う必要があると訴えるようになり、ついには女性の自立と権利獲得よりも、まず国家の存亡の危機を救わなければならないと考えるに至った”（竹内理樺、2007年）。

蒋介石政権に失望を感じ、共産党が指導する革命に参加するため、延安に行く女性もたくさんいた。統計によると、当時延安での革命活動に身を投じた女性の中、10%は大学生で、70%以上は中学生および高校生である（「王明同志在中国女子大学開学典礼大会上的報告」参照）。当時の時代背景から見れば、彼女たちは既に良好な教育を受けており、女性解放思想の影響を受けたはずである。実際、彼女たちは夫や子供に奉仕し家庭に専念すべきという伝統的な生活を捨て、激動な革命に身を投じること自体も女性解放の色を強く帯びていた。彼女たちは“一般的に見れば、負けず嫌いであり、女性の弱さを一生懸命克服しようとしている。勉強にしても、体育や生産活動にしても、常に男性を基準にしていた”（謝克、1946）。こうした女性解放への考え方が、中華人民共和国の成立後に彼女らが男子様式のレーニン服を変わらずに愛用していた要因の一つと考えられる。

ここで注意すべきなのは、彼女たちの男性の基準に合わせた行動、つまり“脱女性”の行為の根源は、共産党の意図的な教育によるものではなく、早期の女性解放思想に由来するものであったという点である。ただし、この両者には共通点が存在しており、延安で受けた教育が彼女たちの考えをさらに強化した側面はあるだろう。

ドイツの社会学者ジンメルは、階級社会の視点から流行のメカニズムを説明したが、その考え方はレーニン服の流行がなぜ生じたのかを理解するために有用である。彼のトリクルダウン（trickle down）説によると、上流階級があるスタイルを創造すると、下層階級はそれに憧れ、同一化しようと模倣する。こうしてスタイルが広く下位の階層に広がり、流行が創造されあるいは更新される。中華人民共和国成立後の最初の7年間、レーニン服の流行はまさにこれに当てはまるものであった。

中華人民共和国成立初期、社会進出を果たして、経済的に自立している共産党の女性幹部に対して、羨望の眼差しが向けられた。著名な声優の蘇秀は、自身の回想録に次のよう

に書いている。“1949年5月、上海が解放された……私は青いレーニン服を着るショートヘアの女子幹部を羨ましくてたまらない。あのような服装を着たい、あのように社会に進出して仕事をしたいと思った”（蘇秀、2005）。このように女子幹部に憧れ、同一化しようと模倣することで、レーニン服は全国的に広がったのである。

3.2 “カラフル服装運動”の展開

“レーニン服を着る人は年々増加していく、党の幹部のみならず、社会の各階層、主婦や農民、小学生までレーニン服を着用していた”（張琴秋、1955）。やがてレーニン服の流行は、「氾濫」と表現しうるような様相を呈するようになった。そうした状況を改善するため、共産党と中央政府はトップダウン方式で“カラフル服装運動”（原文「穿花衣运动」）を展開し、国民、特に女性にレーニン服以外の多様な、カラフルな服を着るように広く呼びかけた。

1954年の後半から、中国の主要新聞と雑誌は続々と多様な服装文化を提唱する論評を発表した。1954年9月17日「人民日報」は社説「綿布と綿花の統一購入および統一販売の政策を徹底的に執行する」（原文「贯彻棉布统购统销和棉花统购政策」）で“制服だけ着る習慣を改めれば、生地を節約できると同時に、私たちの生活はより豊かになる”と多様な着装を提唱した。

その後、1955年に雑誌『新中国婦女』第三期は、郁風の評論文「今日の婦女の服装問題」（原名「今天的妇女服装问题」）を掲載し、人々は置かれている状況に応じて服装を選択すべきであると指摘した。さらには、同年5月17日上海の『青年報』は評論文「若い娘のカラフル着装行為を支持する」（原文「支持姑娘们穿花衣服」）を公表した。また11月に紡織工業部副部長であった張琴秋が雑誌『新観察』に寄稿し、女性幹部が率先して多様な、色彩豊かな服装を着用することを呼びかけた。

1956年2月1日、婦女連合会は服装の様式、その裁断、配色等をテーマとする座談会を開き、服装は社会主義生活の表現であり、中国国民の生活レベルは日々向上するにつれて、国民の服装も日々美しくなるべきであると提言した。1956年3月17日、『中国青年報』は「私たちの服装をより美しいより色やかにする」をテーマとする特集を組み、いろんな様式の服装図を掲載した。同年6月、上海婦女連と美術家協会は共同で上海、北京での服装万博会を開催し、非常に歓迎された。

カラフル服装運動の展開により、美的意識が再び重視されるようになり、チャイナドレスを着用する女性が増え、ソビエト仕様ワンピース（中国では布拉吉と呼ばれる）が女性の間で流行し始めた。女性の服装文化は正常な軌道に戻ろうとしていたが、政治環境の変化により社会意識はさらに歪んだ方向に急進行した。

3.3 レーニン服の継続——やむを得ない選択

中華人民共和国の成立に伴い、中国共産党は「革命党」から「執政党」へとその役割を変えなければならなかった。国家建設という大きな課題を前に、政権運営の経験のない中国共産党は社会主義国家の建設に全力を投ずることになったが、道は平坦でなかった。非現実的な経済目標を目指す大躍進運動により、回復に向かっていった中国の経済態勢は一転して極めて困難な局面に直面した。それにより、女性の服装消費は事実上不可能な状態に陥った。そして階級闘争を過剰に強調する政治路線により、社会主義イデオロギーは硬直化され、おしゃれは資産階級の生活方式だと認識された。それが女性の服装選択・服装消費の回避に拍車をかけ、女性にとって、レーニン服の着用はやむを得ない選択となった。

1956年2月、ソ連共産党の第20回党大会でフルシチョフは「秘密報告」を行い、スターリンの政治的罪を徹底的に暴露し、世界に衝撃を与えた。毛沢東をはじめとする党の中央部はソ連の失敗を、階級闘争が軽視され資本主義体制に妥協的な修正主義が台頭した結果だとみなした。そしてソ連と同じ失敗を繰り返さないように、中国の主要矛盾を「先進的な社会主義制度と落伍する社会生産力の矛盾である」との見解から「社会主義社会が建設されるまでは、プロレタリア階級との闘争、社会主義の道と資本主義の道との闘争が主要矛盾である」と変更した（1958年5月、第8回党大会第二回会議で劉少奇の「工作報告」参照）。

そして国家建設におけるソ連モデルの再検討と、「独自の建設路線」の提起を急ぎ早に行った。社会主義世界の優越性を証明するため、毛沢東の主張を基に、1958年5月、中国共産党第8回党大会にて、「ファイトを燃やし、高きを目指し、多く、速く、立派に、無駄なく社会主義を建設する総路線」が提出され、社会主義の建設について「過去の中国やすべての資本主義国より倍、何倍あるいは何十倍も速くしなければならない」と要求され、この要求に相応して非現実的な農生産、鉄鋼生産の高い目標が設定された。

これらの目標を達成するため、全国の農村では大増産キャンペーンが行われた。地方幹部は目先の功を争い、農産物の生産量を現実とは大きく離れた数値で申告した。例えば、1958年8月27日『人民日報』はトップ一面で評論「人間は大胆な考えさえあれば、土地の生産量はこれに應えていく」（原文「人有多大胆、地有多大产」）を掲載し、山東省にある農地で1ムーで6000kgのトウモロコシを産出した事例を報道した。その後このような虚偽の申告が盛んに見られるようになり、重さ50kgの白菜が報道されることもあった。

中央政府は、地方から報告された生産量の一定割合の穀物を徴収するため、多くの農村は食糧を洗いざらい中央に納付することになった。それは生死の境をさまようほどの状況をもたらし、とても服装まで考える余裕はなかった。労働力の貧弱は農業の不作をもたらし、農業の不作により食料、綿花、食用油をはじめ農産物を原料とする軽工業製品の不足がいたるところで発生し、市場における服装の供給はわずかになった。

それと同時に、鉄鋼生産目標を達成するための製造運動も全国で展開されたが、専門の技術者もそれに適した設備もなく、殆どの生産は素人が原始的な溶鉱炉（土法炉）を用いて行った。その結果として、大量の木材が伐採されたにもかかわらず、作られた鉄鋼は殆ど粗悪なもので使いものにならなかった。しかも鉄鋼製造運動に参加するため、農民が大量に駆り出されて、管理がずさんとなった農地は荒れ果ててしまい、農村の困窮に拍車をかけた。

また、市場における商品供給は不足がちになったため、多くの民生用品は国の配給制度により支給された。当時国民一人当たりの年間綿布の購入可能な量はわずか三尺（1メートル）であり、継ぎを当てることしかできず、全国民の服装消費は“破れるまで着る、破れたら縫ったり繕ったりしてまた三年間これで我慢する、いわゆる“新三年、旧三年、縫縫補補又三年”という方式だった。こうして、女性の服装選択および服装消費の経済基盤は破壊されたのである。

一方「階級闘争を以って綱要と為す」という国家方針のもとで、国内の政治環境は日々厳しくなり、毛沢東の大躍進政策に苦言を呈した彭徳懷、劉少奇などの党内の高級幹部も厳しく批判、処罰された。人々は自分の政治身分に敏感になり、資産階級の生活方式に過剰な注意を払うようになっていた。

1964年5月、上海のある服装店が「社会主義商業は社会風潮に害を与えるような商品を生産しない」という主張のもと、ズボンの裾を小さくしたいという客の要望を拒否したことが報道され、議論の焦点となった。中国の重要な政府系新聞『解放日報』は特別コラムを設定し、このことについての論争を呼びかけた。読者からの反応は熱烈であった。新聞社に届いた手紙は1690通以上にのぼり、一日200通以上の日もあった。この論争により、“奇装異服”を着ることは資産階級の生活方式だとの認識は強化・普及された。しかし“奇装異服”とは何かについての判断基準は極めて曖昧であったため、人々は薄水を踏むかのように、安全なレーニン服以外の服装を極力避けるようになった。こうして政治、経済、文化のすべての面において、レーニン服の着用は中国女性にとってやむを得ない選択となったのである。

1950年代中期から、中国とソ連の関係は悪化の一途をたどった。1969年3月、国境問題をめぐり中ソ間の大規模な軍事衝突が発生し（珍宝島事件と称する）、中国とソ連の関係は徹底的に破綻した。レーニン服もこの過程でその革命の象徴とする意味を徐々に失い、軍服に主役の座を譲り、歴史の舞台から姿を消した。

おわりに

1949年中華人民共和国成立後、伝統的な服装は歴史の舞台から姿を消して、レーニン

服は17年にわたり中国女性の主要的な服装となった。それは中国共産党の政治圧力および社会主義イデオロギーの主導によるものだとの見解が一般的で中国社会に定着していたが、本論はこれまで見落とされていた1950年代中期中央政府により展開された“カラフル服装運動”(原文「穿花衣运动」)に注目し、政治強制および社会主義イデオロギー主導説に疑問を提起し、より詳細的な歴史分析を行った。

レーニン服は1940年延安の女子大生がソ連の男装を参考に自ら製作した服であり、1940年3月8日の国際女性デーを祝うグループダンスで正式に披露された。ベルト付きのレーニン服はウエスト・ラインを強調することで女性の身体曲線美を表現し、延安の女子大生に愛用された。その最初の流行は中国共産党の意図によるものではなく、延安の女子大生の美意識から出発したものであった。

中華人民共和国成立後、女子大生たちは共産党の女性幹部に成長してきたが、レーニン服を相変わらず愛用していた。時代の先進女性と見なされた女子幹部への憧れにより、他の階層の女性もレーニン服の着用を模倣し、レーニン服は迅速に全国へと広がった。以上のことから、中国建国初期において、レーニン服の全国的普及は主に女性自身の美意識と個人選好によるものであり、政治的強制によるものではなかったと言えるだろう。

しかし、1950年代中期、ソ連モデルの失敗が暴露され、これを教訓に、中国国内で「階級闘争」は再び強調され、経済建設も無謀とも言えるようなスピードで急推進され、逆に経済の失速をもたらした。経済の不振により国内市場における商品供給は不足がちになり、女性の服装消費に大きな制限をかけた。また経済混乱を巡り上層部の紛争が激しくなり、極端的な階級意識を醸し出した。人々は自分の政治身分に敏感になり、資産階級的生活方式に過剰な注意を払い、レーニン服、中山服等革命様式以外の服装の着用に回避の姿勢を取った。この段階では、レーニン服の流行は個人意識とは関係なく、政治要因に強く影響された。

以上のように、レーニン服の流行のメカニズムは時代的に普遍ではなかった。早期では共産党の女性幹部への憧れから出発した模倣が主な要因であったが、中期以降は政治に後押しされたものだったのである。一概に政治の圧力および社会主義イデオロギーの影響に帰結しえないと本稿は主張する。

参考文献

- 丁雪松口述、楊德華記録 2000『中国第一位女大使丁雪松回憶録』江蘇人民出版社, pp. 275-276
 G. ジンメル著、円子修平・大久保健治訳 1999『ジンメル著作集 7 文化の哲学』白水社
 Jean Baudrillard. 宇波彰訳『1980物の体系——記号の消費』(Le Système des objets) 法政大学出版局
 康有為 1935『大同書』中華書局, pp. 162-163
 李子雲・陳惠芬・成平 2009『チャイナ・ガールの1世紀——女性たちの写真が語るもうひとつの中国史』三元社, p. 142

- 潘敏 2002 「20世紀50年代以来中国服飾の発展与演变」『文史雜誌』2002年第一期, pp. 48-51
- 漱六山房 192 「着絲袜是吃外国屁」『閑者の盛宴』pp. 196-198
- 「上海顔色問題」『新上海』1925年第三期
- 蘇秀 2010 『我的配音生涯』文匯出版社, 2005年。徐華龍 2010 「上海服裝文化史」東方出版中心, p. 271
から引用
- 鳥居龍藏 1951 「服は銀鼠・黒の一色一変した北京」『読売新聞』夕刊1951年12月9日
- 湯礼春 2012 「軍装与粮票的記憶」『山西老年』2012年第4期
- 湯銳 2017 「審美与政治: 20世紀50年代城市女性流行服飾探析」『中華女子学院學報』2017年第4期,
pp. 81-89
- 王明 1939 「王明同志在中国女子大学開学典礼大会上的報告」『中国婦女』1939年第1卷第3期,
- 徐嵐 1999 「女大的労働生活」『延水情: 紀念延安中国女子大学成立六十周年』中国婦女出版社, p. 253
- 謝克 1946 『延安10年』上海青年出版社, pp. 66-67
- 楊清 2012 「从中国婦女的社会地位看列宁装」『美与時代』2012年第4期, pp. 94-96
- 朱鴻召 2007 『延安——日常生活中的歷史1937-1947』広西師範大学出版社, p. 271
- 張琴秋 1955 「談談服裝問題」『新觀察』1955年第11期, pp. 3-5

図版出典

- 図1、2 「中国日報」中文網2015年12月11日「這一百多年来中国女人都穿過啥樣的衣服」
http://pic.chinadaily.com.cn/2015-12/11/content_22693459_16.htm
- 図3 李子雲, 陳惠芬, 成平編著/友常勉, 葉柳青訳『チャイナ・ガールの1世紀——女性たちの写真が語るもう一つの中国史』三元社
- 図4 1951年10月にレーニン服を着用して、中国人民志願軍の戦闘英雄を歓迎する党の女性幹部。「中国日報」中文網2015年12月11日「這一百多年来中国女人都穿過啥樣的衣服」
http://pic.chinadaily.com.cn/2015-12/11/content_22693459_16.htm
- 図6 人民網 <http://pic.people.com.cn/n1/2017/1127/c54965-29669993-23.html>